

ジョン・ヒックの宗教的实在論

方 俊植

1. はじめに

イギリスの宗教哲学者かつ神学者であるジョン・ヒック (John Hick 1922-) は、宗教多元主義を代表する人物としてよく知られており、彼の理論はキリスト教と他宗教との位置づけや宗教間の対話などを議論するときによく引用されている。ヒックは1973年に出版された *God and the Universe of Faiths* のなかで、キリスト教も他の諸宗教も同等の立場で「神中心」の回りをまわっていると考えるべきである、と主張した。いわば、「コペルニクスの転換」のようにキリスト教には大きな変革が必要であることを力説した。その後、1980年後半になると、ヒックは、こうした議論を、宗教多元的な状況——宗教が複数存在している——を説明する理論、すなわち一つの仮説⁽¹⁾として展開するようになった。しかし、彼の理論は類型論——排他主義（教会の外に救いはない）、包括主義（キリストの働きによって、救いの過程が世界の中で、偉大な世界信仰の内でも外でも生じつつあると認める立場）、多元主義（偉大な世界信仰にはキリスト教と同様に、それぞれ独自の救いの過程やそれに該当するものがあることを認める立場）——を中心に断片的に紹介され、十全な議論の場が形成されないまま評価されてきた。

その結果、宗教多元主義仮説はキリスト教が神から啓示を受けた唯一の宗教であるということ放棄するものと見なされ、神学の側からヒックの教義の理解をめぐる批判が集中することになった。しかし、注目すべき点は、ヒックの宗教多元主義仮説は、彼の包括的な宗教理論全体——宗教の概念規定、宗教史（ヤスパースの基軸時代以前と以後）、宗教批判、宗教的多元性——によって構成されていることである。つまり、ヒックの思想全体を正しく理解しないと宗教多元主義仮説の意味を明確に捉えることはできないのである。

本稿では、こうした包括的な宗教理論の中でも、とくにヒックの宗教的实在論について、その内容を検討したい。というのも、宗教的实在論の議論において、ヒックの宗教論の中心的な主張の一つを確認することができるからである。実際、宗教的多元性として記述される宗教的状況を

(1) 原文では *Pluralistic Hypothesis* であるが、本稿では「宗教多元主義仮説」と訳すことにする。この仮説の内容は次の通りである。「偉大な諸々の世界宗教は人間の様々な文化的ありかたの中から、実在者あるいは究極者に向けられた異なる知覚と概念、そして、これに見合った異なる対応を具体的に表したものだ。」ジョン・ヒック著『もうひとつのキリスト教—多元主義的宗教理解—』（間瀬啓允・渡部信訳、日本キリスト教団出版局、1989年。p. 155.）

理論的に説明するには、必ずしも実在論をとる必要はなく、それは、宗教的多元性についての非実在論によっても可能であり、ヒックの宗教的多元主義の特徴は、その実在論の中に認められるのである。

2. 実在論とその留意点

ヒックの「宗教的実在論と非実在論」(Religious Realism and Non-realism) という論文⁽²⁾ は彼が主張する宗教的実在論を明確に理解するのに有効である。本稿は、この論文を手掛かりにして進められるが、その前に、ヒックの宗教的実在論に関わる以下の留意点を指摘しておきたい。

まず、実在論と非実在論という問題は、近代以降の哲学における認識をめぐる一連の議論(認識論)、特に、実在論と観念論との論争の中に位置付けられる。実在論は一般に、「感覚知覚において、我々はすべての知覚者から独立して実在する環境世界に触れる」と主張するが、それに対して、観念論は「知覚された世界は我々自身の意識による一連の変容としてのみ実在する」と考える。そして、ヒックによれば、実在論は、「世界は我々がそれを知覚するまさにそのような仕方方で存在する」という素朴な実在論 (naive realism) と、批判的実在論 (critical realism) に区分される。(DQ:4.)

批判的実在論とは、「我々の知覚に対しては主観が重要な寄与を行っており、経験される世界は実在的環境が感覚器官に及ぼす影響から発生すると同時に、文化的に発達した形式をもつ意識と言語における概念化を施されたものである」と説明されている。(DQ:4.)

こうしたヒックの哲学思想史における実在論と非実在論の位置づけは、明らかにカントの批判哲学の前後における哲学的な実在論の転換を念頭においたものと言えよう。つまり、そこには、素朴実在論が、批判哲学あるいは観念論の批判を受け、批判的実在論へと展開したという経緯が存在しているのである。もちろん、以上の近代以降の認識論と、宗教的実在論をめぐる議論とは、一方は環境世界の認識を、他方は神などの信仰対象の認識を扱ったものであり、論理的に別々の独立した問題であって、ヒックが宗教的実在論を主張する場合も、知覚、倫理、美、学、宗教などの諸領域のすべてにわたる汎実在論 (pan-realism) を提唱しているわけではない。⁽³⁾ 知覚についての実在論者が、美的対象については非実在論の立場をとることは可能である。しかし、こうした点を認めた上で、ヒックは、環境世界の实在性をめぐる、素朴実在論、観念論、批判的実在論という論争状況が、宗教的な実在についても、類比的に当てはまると考える。

こうした類比についてヒックは十分に理論展開を行っていないが、「宗教言語についての実在論的理解と非実在論的理解は現代の宗教哲学におけるすべての問題の最も根本的な事柄を頭わにしている」(DQ:3.) という言葉から、類比の中心に言語が位置付けられ、しかも言語における指示機能——「批判的な宗教的実在論は、有神論的宗教が神として指示する (refer to) 超越的な神

(2) John Hick *Disputed Questions* (New Haven: Yale Univ. Press; London: Macmillan1993)3-16頁。

(3) Ibid., p. 4. の内容を要約。

的実在を肯定する」、「宗教的非実在論」は「宗教言語が超越的な実在あるいは諸実在を指示する (referring to) とは解釈しない」——が問題とされていることは明瞭である。

以上の留意点に基づいて、ここでは次の論点について、ヒックの宗教的な実在論を分析することにした。

- ・ 素朴実在論と批判的実在論との区別、ヒックの宗教的な実在論は宗教言語についての批判的実在論である
- ・ 非実在的な宗教論と無神論との区別と共通点、ヒックはこれらをいかに論駁しているか
- ・ 宗教的実在論と宗教的非実在論との真の争点は何か

3. 批判的実在論としての宗教的実在論

各宗教の中心にある、超越的な実在は、日常的な言語を使用することによって語られてきた。その理由の一つは、キリスト教の場合、神は無限なる人格的な存在として認識されていることに起因する。そして、その根本を支えるのが、我々を囲む世界はありのままの世界、あるいは、見えるままの世界として理解する素朴実在論である。

「単純な信仰者 (simple believers) は、一般に類似した素朴な実在論のなかで思考している。神は宇宙の上にあるもしくは外にあるということに関して、それらの聖典および伝統的な教えを字義どおりに解釈してきた。」 (IR:174.)

素朴な実在論者が宗教的な言明を字義どおりに解釈するというのは、その言明を「メタファーあるいは神話としてより、むしろ率直」 ('straightforwardly rather than as metaphor or myth') な表現として捉えることを意味する。(DQ:6.) すなわち、聖書に記述された「神」に関する言明は「神それ自体」のあり方を記述することとして理解された。それによって、観察できる言葉もしくは日常的に使う言葉をそのまま「神」を語る場合に使用しても、なんの問題も困難も生じないと見なされることになる。これは、実在(神)をいわば直接に知覚する事が可能であることを示唆する。なぜならば、我々は眼に見えるように神に関して語っているからである。

しかし、このような素朴な実在論の問題点に対して、ヒックは、「宗教的な言明のすべての領域は多様な言語の非認知的な使用——たとえば、感嘆詞、命令そして勧告、遂行的な表現など——が常に含まれていた」ものの、(IR:176.) たとえば、「神は人類を愛している」とか、「クルアーンは神の言葉である」とか「超越的な自我 (Atman) はブラフマン (Brahman) である」など宗教的な言明の大半は、認知的に使用されてきたと指摘する。ここで問題になるのは、「父なる神」とか「神は人類を愛する」という宗教的な言明を字義どおりに解釈する場合、「神」は我々が持っている父のような品性を持ち、人間が持っているのと同じ「愛」の概念を持つと解さざるを得ないという点である。

「おそらく素朴实在論者は、・・・人類はその起源において見るならば単一の男女から構成され、彼らは、反抗のために追放されるまではエデンの園と呼ばれた場所に住んでいた、などと信じるであろう・・・あるいは、素朴实在論者は、神を空から我々を見下ろす偉大な超人間的な人格と考えるかもしれない。」(DQ:6)

しかし、宗教言語の字義的解釈に対しては、世俗的な意味で使われる言葉が神に適用された場合、それが同義的に使用されていないという論点から、これまで多くの反論がなされてきた。さらに言えば、神を日常的な認知のレベルで実体化することは、宗教自体が強く主張してきた神の超越性を損なうことになり、とくに、素朴实在論に基づく神人同形説的な神理解（「空から我々を見下ろす偉大な超人間的な人格」）は、近代的世界観によって規定された現代人の経験にとっては合理性を欠いたものと受け取らざるを得ない。

したがって、ヒックは、宗教言語が認知的使用されることについては認めるものの、宗教的な言明の字義的な解釈に対しては否定的である。科学が高度に発達した現代においては、宗教言語の字義通りの理解は非合理的であるとみなさざるを得ないからである。こうしてヒックは、自らの宗教的实在論を素朴实在論としてではなく、むしろ宗教的な言明を字義とおりのに解釈することに反対の立場である批判的实在論として構築することになるのである。

批判的实在論は1916年にセラーズ(Sellars, Roy Wood)が著述した書物の表題であり、彼と見解を共有している学者たちによって推進された一つの哲学運動として登場した。

小倉和一によれば、批判的实在論とは、「認識内容すなわち表象のみが認識の直接的対象となりうると考えられ、経験だけによっては、外的対象には決して到達できない」とする観念論と「認識内容を認識対象と同一であるとして、認識対象が完全に認識できると考える」直接的实在論(direct realism = 新实在論)を拒否する立場である。⁽⁴⁾

なぜなら、観念論と直接的实在論は一見相反する立場に立ちつつも、結果として、両者とも、認識において認識者の相対的な見解が入り込む余地をなくすからである。これに対して、批判的实在論は、以下の引用文(ヒックによるセラーズからの引用)に示されたような、事物と客体、感覚と知覚とを互いに区別することによって、文化的な制約下にある認識者の認識が有する「認知的な自由度」(cognitive freedom)——たとえ、それによって認識における誤謬も生じるとしても——を適切に理解することを可能にする。

「知覚することは感覚すること以上のものを含んでいる。・・・そこには、信念、構成、解釈が存在し、これらすべてが事物の認識(awareness)と解されるものの原因となる。……単独で与えられた感覚的な現象の直観と、信じられ特徴付けを受けた客体の外延的な選択との間の区別を(我々は必要とする。)・・・要するに、知覚された事物に関するあらゆる種類の

(4) 芦名定道編『科学時代を生きる宗教—過去と現在、そして未来へ—』(北樹出版、2004年、p.58.)内容を要約。

「事実は、・・・我々の知覚的な経験に影響する。・・・態度、期待、記憶、受容された事実、これらはすべて解釈的に作用する。・・・というならば、刺激と複雑な解釈的反応が存在するのである。」(DQ:5.)

すなわち、このような現代の認識論をめぐる論争において提出された批判的实在論をいわば類比的に用いることによって、ヒックは自らの宗教的实在論を批判的实在論として提示する。それは、宗教経験とそこにおいて成立する認識などが、一方で、超越的な实在との関係を有することを認める点で、「实在論」である。しかし他方で、その経験の具体的な構成においては歴史的あるいは文化的に制約されたもの、つまり、相対的あるいは主観的であることを認める点で、「批判的」である。哲学的認識論で論じられる事物の認識だけでなく、宗教的实在の認識に関しても、我々の具体的な認識は認識者の主観的な関与・貢献が必要なのであって、宗教的实在論は、この点を認めるという点において、宗教経験をめぐる現代の様々な経験科学的なアプローチに開かれているとみなすことができる。

この点に関して、ヒックは、素朴实在論と批判的实在論の相異なる立場を聖書の解釈を用いて明確にする。たとえば、先に引用した素朴实在論者の創世記理解とは異なり、批判的实在論は、この聖書の箇所を「各世代に生じた道徳的また精神的な混乱状態を描写する神話的な物語」として捉える。また、素朴な实在論者が「神」を「空から我々を見下ろす偉大な超人間的な人格」と考えるのに対して、批判的实在論者は「究極的な实在の普遍的な現前とユダヤ人の文化的に特定の思考形式が一緒になって形成された特殊な歴史的人格 (persona) としてのイスラエルのヤハウェ」など様々な形式、たとえば、三位一体の神、アラー、ブラフマンなどを取り上げることができる。(DQ:6.)

以上より、「神的な現前と人間的な投影の両方」を認めるのが、ヒックの宗教的实在論であると結論づけることができる。

「批判的な宗教的实在論者は、有神論の宗教が神として指示する超越的で神的な实在を肯定する。しかし、彼は、この实在が人間の概念とイメージによって形付けられ、色づけられた仕方において、我々によって常に思考され、経験されることに気づいている。」

(DQ:7.)

ヒックの批判的实在論は、有神論(キリスト教)の立場を擁護すること(实在論)と、实在是様々な文化や伝統のなかで多様な形態で経験されることを強調すること、この二つの意図を有している。これらの両面は、ヒックの宗教的多元主義仮説の論点としていずれも重要であり、ヒックの宗教論においては切り離すことはできない。しかし、ヒックの批判的实在論は、近現代の認識論と宗教的实在論との議論の類似性を指摘しつつも、その議論は表面的な比較にとどまっているとの印象は免れないように思われる。おそらく、ヒックの議論は様々な点で改訂し補足することが可能であり、また必要であろう。ここでは、聖書テキストの解釈における神話的あるいはメタファー的な解釈という問題との関わりで、以下の二つの点のみを指摘しておきたい。

ヒックは、素朴实在論と宗教言語の字義どおりの解釈との関連を述べる際に、「言語の字義どおりの使用 (literal uses) と非字義どおりの使用 (non-literal uses) は、本質的にはっきりと区別されるものではなく、むしろ正当な語の使用の連続体を構成している」と指摘している。(DQ:6.)⁽⁵⁾

つまり、素朴实在論と聖書解釈との間には単純な一対一対応ではなく、一定の幅の中での関係づけが存在しているのであり、それは、批判的实在論と聖書解釈との関わりにも妥当するように思われる。批判的实在論者が聖書を神話的もしくはメタファー的に解釈する場合にも——一見すると、宗教的な非实在論者の聖書解釈と同様に見える議論がなされているとしても——、それは、聖書のメッセージの真理性を否定することを意図したものではないことに留意することが必要である。こうした点については、今後ブルトマンの聖書解釈 (非神話化的解釈) との比較検討が必要になると思われる。

4. 非实在論

神、超越者、实在者は人間の概念として、言語と宗教的な生活形態のなかで作用する概念としてのみ存在するという非实在論は、ヒックによると、宗教的な非实在論から、無神論 (非宗教的な非实在論) まで、多様な形態を持っている。しかし、これらに共通するのは、次のような宗教言語の解釈である。すなわち、「非实在論は、宗教言語を、超越的な实在あるいは諸实在を指示するものとしてではなく、我らの感情、あるいは我らの基本的な道徳的な洞察と意図、あるいはまた世界を見る我々の見方を表現するものとして、また我らの道徳的、精神的な理想を指示するものとして解釈するのである」。(DQ:7.)

ヒックは、このような宗教言語に対する非实在論者の根本を支えるのが自然主義的な信念であると指摘した上で——この点についてはのちほど論じる——、まず、フォイエエルバッハを非实在論の出発点として取りあげている。フォイエエルバッハによれば、

「神は理想的な人格のイメージ、すなわち、我々に神聖なる命令を与え、恵み深き神的な現前として我々を支えるようにと、天の広大さに向けて、想像力において投影された人間精神のイメージなのである。」(IR:190.)

従って、「愛する神」という考えは、我らの理想の愛を宇宙の上に投影したものであるということになる。つまり、神は宗教的な想像力によって擬人化され、崇拜化されてきたのである。では、宗教的な实在論と非实在論との論争において、フォイエエルバッハの投影理論の意義はなにか。

(5) ヒックは「神話」について、次のように述べている。「神話は字義とおりの意味では真ではないが、その主題に対して相応しい傾向的な態度を喚起するという、実践的な意味では真でありうる。」すなわち、神話は「大きく広げられたメタファーである。」ヒックに取って神話は完全な架空の物語ではなく、それぞれの度合いで真実性をもっていると見なされる。(MG :105.)

「フォイエルバッハは、宗教言語は疑わしい超越的な実在に関するの間違った言明を成すという、非宗教的な無神論者の実在論的解釈 (the non-religious atheist's realist interpretation) の基礎を築いただけではなく、宗教言語は人間精神や人間の可能性についての正しくはあるが偽装された言明を成すという、宗教的無神論者の非実在論的解釈 (the religious atheist's non-realist interpretation) の基礎も築いた。」(IR:192.)⁽⁶⁾

このようにフォイエルバッハの議論は、宗教的な非実在論者に対しても神に関して語ることを可能にしている点に意義がある。しかし、注意すべき点は、それぞれフォイエルバッハの影響を受けつつも、非実在論と無神論とは明確に区別されねばならない——両者は非実在論という共通性を有するが——。なぜなら、無神論者 (A.J. エイヤー、A. フリュウ、P. エドワーズらの現代の哲学者など) は宗教的な議論を価値がない有害なものとして捉えるからである。このような反宗教論に対して、フォイエルバッハの影響を受けつつも、宗教自体の価値や意義を肯定する宗教的な非実論者 (サンタヤナ、デューイ、ランダル、J. ハクスレー、R.M. ヘアラ) の中で、ヒックは、とくにフィリップス (D.Z Philips) とドン・キュピット (Don Cupitt) の議論に注目する。

まず、フィリップスであるが、彼は後期ワイトゲシュウタインの強い影響を受け、「宗教＝言語ゲーム」論を展開した。フィリップスは、信念、希望、祈り、などの用語の宗教的な使用は、宗教という言語ゲーム (有神論的な生の仕方あるいは形式) のなかに基礎付けられるとのべた。すなわち、神が有神論的言語ゲーム内部において有意味な仕方機能する限り、その言語ゲームの外部からなされる批判は妥当しない。

「神が実在するとは、宗教的な人々の特有の表現とコミュニケーションのなかで神の概念が有効に働くことを意味する。」(DQ:8.)

このようにフィリップスの議論にしたがうならば、信念や祈りなどの宗教的観念や実践は、宗教経験のもとに固有の合理性を有するものとして基礎付けられることになる。従って、神の観念を認めることは、有神論的な言語ゲームに参加することを意味するのであるから、もし、神という観念を諦める場合、信念、希望、祈り、などの用語に含まれている伝統的なもの (=生の形式) も断念することになる。

これに対して、キュピットは「神は我々の精神的な理想の想像上の擬人化である」と主張する立場の代表的な人物である。そして、「多様な超自然の存在や力や出来事を含んでいると理解される場合、その宗教的な信念は明白に誤っている」と指摘する。(DQ:8.) このように、キュ

(6) 「非宗教的な無神論者の実在論的解釈」と「宗教的な無神論者の非実在論的解釈」は、『宗教の解釈』の用語であるが、本論文では、本節の冒頭に述べたように、論文「宗教的な実在論と非実在論」に従って、本論文の用語法に合わせて、議論を進めることにした。ここでの「非宗教的な無神論者」は、本論文での「無神論者」あるいは、「非宗教的な無神論」と呼ばれた立場であり、また、「宗教的な無神論」とは、本論文での「宗教的な非実在論者」対応する。

ピットの議論の特徴は、伝統的な有神論を拒否することにある。すると、このキュピットの立場は、無神論とはどのように区別されるのか。「神が存在する」ということが何を意味するか明確に説明できない限り（＝真でも偽でもありえない形而上学的な発言）、「神が存在する」と有意味な仕方では語ることができないとするエイヤーの見解とは、明確に区別される。なぜなら、キュピットは、神の存在（実在）に対しては否定の立場に立つものの、宗教そのものに参与することによって得られる道徳的な信念や宗教的实践についてはその意味を承認するからである。

「宗教的な非実在論者は宗教言語全般を使用することが可能であり、また確立された祭儀に参加し、信仰告白や祈祷文を朗読し、聖書に耳を傾け、讃美歌を歌い sacrament を受けることができる。」(DQ:9)

しかし、こうした非実在論者が行う伝統的な宗教的生への参与は、「この活動はそれ自体の内に自律的な目的を有しているとの信念」という暗黙の前提の下に行われる。

この点に関連して、キュピットは、「近代において、人間の意識は、結局個別化され、また自律的になってきた」と論じる。(IR:200.) たとえば、人間が行う行動の道徳的意義は外部の権威——有神論の立場から言えば、神——に依存していない。我々の行為が正しいかどうかは、我々自身の合理的な本性によって認識されねばならない。ここで言及された自律性の問題は、カントの倫理学において主張されたものであるが、キュピットが述べるように、19世紀以降、道徳性を外部のいっさいの権威に依存しない固有の自律的なものとして確立しようとしたカントの立場が、広範に受け入れられてきている。

以上を確認した上で、倫理における自律性と類比的に、キュピットは、「今や我々は宗教の自律性を認識しなければならない」と主張するのである。(IR:200.)

倫理学と同様に、宗教もまた、外部からの権威に依存せずそれ自体において妥当性を確立できるような精神性の実践として発展すべき時代を迎えているというわけである。

「利己的でない思いやりや私心のない平静さへと高まるようにとの『宗教的な要求』は、我々の内にある可能性を表現しているのであって、それを成就することはそれ自身の報酬なのである。」(IR:200.)

以上のように、フィリップスとキュピットは同じ宗教的な非実在論者でありながら、その主張には明確な差がある。フィリップスが非実在論という立場からではあるが、有神論の枠組みを基本的に尊重し支持するような宗教哲学を展開するのに対して、キュピットは神の実在に関する限りは、現代の無神論的な宗教批判にいつそう接近している（＝ポスト実在論的な宗教世界を自覚的に生きること）。次の章では多様な形態を持つ非実在論と実在論の真の争点について見て行きたい。

5. 宗教的实在論と非实在論的宗教論との真の争点は何か

ヒックが宗教的多元性の状況について、宗教的实在論という立場に立って宗教多元主義仮説を提出したこと、その場合の宗教的实在論とは、無神論を含めた宗教的な非实在論に対して、批判的实在論として試みられること、以上については、本節のこれまでの議論によって明らかにされた通りである。次に、ヒックの宗教的实在論に関わる最後の論点として、すでに指摘された宗教的实在論と宗教的な非实在論（ここでは無神論との共通点が問題になる）との真の争点は何であるのかについて分析することにより、ヒックの宗教的多元主義が仮説として提出されたことの意味について考察を行なうことにしたい。

ヒックは宗教的实在論と非实在論の真の争点——この議論の文脈で、キュピットについて議論する際に問題になった自律性とそれに対する他律性という対比などは、真の争点ではないことが確認されている——は、両義的な宇宙についての解釈の仕方に関して認められると指摘する。つまり、「真の争点は、我々が自らをそこに見いだす宇宙の本性あるいは構造に関わっている。宇宙は、人間の観点から見て、善なのか、悪なのか、あるいは中立なのか？」(DQ:11.) 我々はアジア・キリスト教・多元性(5号)で、宇宙は宗教的に、あるいは自然主義的に解釈されること、つまりその意味で両義的であるとのヒックの議論を検討した。その結果、我々が自分の生の意味をどのように実感できるかは、我々が置かれた宇宙の捉え方によって、大きく異なることが明らかになった。

ヒックは、「基軸時代以後の宗教——それは今日我々が偉大な世界的諸信仰と呼ぶものの中で具体化されているのであるが——は、主に救済に、すなわち、人間存在の変革に関わっている」と指摘する。(DQ:11.)

一方で、基軸時代以後の宗教においては、通常の人間の生は根源的に不完全であると見なされる。それは墮落した世界における墮落した生や自己中心的な幻想に埋没しているとか、といった仕方でも理解される通りである。しかし、基軸時代以後の宗教は、他方で、この通常の生より無限により良い可能性を宣言し、それを受け、あるいはそこに至る方法を教える。

「ある宗教は無限に良い可能性が彼岸から与えられると考える。そして他の宗教は、それが此岸の内でも成熟すると考える。偉大な諸伝統にしたがえば、個々の人間は、遅かれ早かれ、変革という通路を通り抜けて、神の国に入ったり、あるいは解脱や涅槃に達することができるのである。」(DQ:11.)

このように、人間が宇宙において様々な悪や不幸に直面すると指摘する点では、基軸時代以後の宗教において具体化された宇宙の宗教的解釈も、あるいは自然主義的な宇宙の解釈も、意見は一致している。両者の違いは、こうした共通の現実認識に立ちつつも、その悪や不幸を解決する方法についてどう考えるかに存しているのである。ここで注目すべき点は、基軸時代以後の宗教を特徴付ける救済(salvation)という概念の背景には、宇宙の中に生きる人間の経験が存在しているということである。救済は、各宗教の伝統のなかで、神、神的なもの、絶対的なものなどと表

現された実在によって付与されると語られてきたが、これらの神、神的なもの、絶対的なものなどは、常に宇宙との連関性のもとで捉えられ、諸伝統のなかで異なった形で概念化されてきた。たとえば、キリスト教が立つ聖書的伝統の場合、神と宇宙、そして人の関係は、次のように表現されている。

「わたしは、あなたの指のわぎなる天を見、
あなたが設けられた月と星とを見ておもいます。
人は何者なので、これをみ心にとめられるのですか、
人の子は何者なので、これを顧みられるのですか。」(詩編 8. 3～4)

聖書的な伝統によれば、神は宇宙と人間を創造した。宇宙は神の宇宙であって、人間は其中で生き、そして神を礼拝する。こうした人間の生きる宇宙の具体的な捉え方は、宗教伝統によって様々であるとしても、ヒックは、基軸時代以後の諸宗教においては、次のような共通理解を見いだすことができると考える。

「諸宗教が指し示す超越的な実在は、直接に観察されたり、あるいは偶然に出会われたりするかもしれないような存在者あるいは人物ではなく、経験された神的なものや絶対的なものを含んだ一切のもの、源泉あるいは根拠であって、それに基づくならば、宇宙は我々人間の視点から見て、究極的に優しく、恵み深いものなのである。」(DQ:12.)

ヒックによれば、基軸時代以後の諸宗教の特徴は超越的な実在との関係のなかで意識的に生きていくことに認められる。それをヒックは「世界の偉大な諸信仰は宇宙的楽観論 (cosmic optimism) の諸形態である」と表現する——もちろん、この楽観論は、日常性 (この世、現世) についての深刻な悲観論を伴ったものであるが——。ここで本稿におけるこれまでの議論との関連で注目すべきは、「偉大な信仰の宇宙的楽観論は、それらの宗教言語の実在論的な解釈に依存している」という指摘である。(DQ:12.)

「宇宙的楽観論は、この宇宙が究極的かつ包括的な恵み深い実在の被造物、あるいはその表現である場合にのみ可能になる。そして、この楽観論によって、我々の実存の精神的な企ては、何らかの形において、この現在の生を超えて継続され、そして人生の旅の巨大な苦勞と苦悩を正当化し得る完成を期待することが可能になるのである。」(DQ:12.)

先に見たヒックの宗教的実在論の立場からの宗教言語の解釈は、このように基軸時代以後の宗教における宇宙の楽観論的な見方 (=宇宙の宗教的解釈) と密接に結びついているのである。この論点を認めるならば、宗教言語の非実在論的解釈が宇宙についての悲観論を帰結せざるを得ないことは明瞭になる。そして、これはまさに宇宙についての自然主義的解釈の帰結なのである。

自然主義的な宇宙と宗教の理解は次のようにまとめられる。

- 「(1) 物理的な脳によって生じた意識を含む物理的な宇宙のみが実在である。
- (2) 人類は地球上に生じた進化の一部で、動物の一形態である。・・・さらに我は想像によって自己を超越する能力に恵まれており、そのおかげで、我々に内在する諸価値を宇宙に投影している。
- (3) 諸宗教の伝統において語られる超自然的な存在や状態は我々の心の中の観念としてのみ存在している。」 (IR:204.)

まさにこの自然主義は、本稿で論じた宗教的な非実在論（無神論を含む）の中心をなすものであり、先に述べたように、宗教的実在論と非実在論の真の争点は、宇宙についての根本的な二つの見方、つまり宇宙の宗教的解釈と宇宙の自然主義的解釈の間に認められるのである。この自然主義が宇宙の悲観論を帰結することについて、ヒックは、パートランド・ラッセルの著作から次のような文章を引用している。

「人間は自らが成し遂げる結果を予知できない諸原因の産物であること、人間の起源も成長も希望や恐れもまた愛や信念も、すべて原子の偶然的衝突の所産に過ぎない、・・・人間の築き上げた神殿の全体が宇宙の残骸の下にめちやくちやになって埋もれることは不可避的であるにちがいない、・・・これらすべてのことは議論の余地がまったくないわけではないとしても、ほとんど確実である。・・・これからは、揺るぎない絶望という確固とした土台の上のみ、魂の住まいは安全に建設することができるのである。」 (DQ:13-14.)

ヒックは、宇宙についての宗教的解釈（宇宙的楽観論）と自然主義的解釈（宇宙的悲観論）とが相互に論駁不可能であり、またその中間の立場もあり得ないと考えているが、宗教的実在論という立場から、ヒックが自然主義を標榜する思想家に対して主張したいのは、もし、自然主義に立つのなら、ラッセルが指摘するように、その絶望的とも言える悲観的見通しも直視すべきだ、ということではないだろうか。自然主義、宗教的な非実在論は、論理的に可能であったとしても、それは、慈悲深い超越的な実在や死後の世界を断念する代償として、神々が立ち去ったこの偶然性が支配する宇宙の中で生きてゆく決意を要求するのである。

ヒックは、以上に加えて、もう一つの論点を提出することによって、自らが宗教的実在論を選択する理由を説明する。それは、いわば共同体的連帯的視点とでも言うべきものである。

「幸運な少数者の視点からは、宗教的な非実在論は良い知らせ (good news) を成り立たせるが、しかし、人類全体という視点から見るとき、それは心から悪い知らせ (profoundly bad news) として現れる。」 (DQ:13.)

確かに、自分の才能を余すところなく開花させ、成功と幸福の内に人生を終えることができる

少数の人間にとって、神や死後の世界の存在を否定する宗教的な非實在論は自分の幸運な人生がそれで完全に完結することを知らせる「良き知らせ」であるかもしれない。しかし、ヒックは、ここで人類共同体の圧倒的多数の人間の現実——「人類史と先史時代を通して誕生した子供たちのおそらくは半分、あるいはそれ以上が、幼少において死亡した、彼らの可能性はほとんど完全に開花されることはなかった」——については、(DQ:13)

宗教的な非實在論は「良き知らせ」ではないどころか、もはや救済の希望なしに生きざるを得ないという「悪い知らせ」ではないか、と主張するのである。ヒックが宗教的實在論を選択する一つの理由は、人類の大多数の不幸な人々の存在を前にしたとき、幸運な少数者のみが自己実現を達成できるということでは正義に適っていないとの思いがあったと言えよう。そして、これはヒックのバーミンガムでの経験にも関わっているのではないだろうか。

この節の最後に確認しておきたいのは、以上の考察からもわかるように、ヒックは宗教的實在論が論理的に正しいと主張しているわけではないこと——宗教的實在論を選択するには別の理由が必要であった——、したがって、宗教的實在論と非實在論の論争はさらなる継続が必要であるということである。ヒックの宗教的多元主義は完全に論証され確定された理論ではなく、その真理性はこの後の論争の正否に依存している。その意味では、宗教的多元主義は、改訂や修正に開かれた一つの宗教哲学的な仮説なのである。

5. 結びに代えて—ヒックの宗教的實在論の意義

ヒックが宗教的實在論を言語の、とくにその指示機能の問題として捉えていたことはすでに指摘した通りであるが、ヒック自身はそれについて十分な議論を展開しておらず、哲学的な認識論との類似性の指摘に止まっている。この点で、ヒックの宗教的實在論ははまだ形成途上であり、今後のさらなる展開を必要としている。しかし、ヒックの宗教的實在論の意図については、宗教的多元性についての理論構築との関係で、高い評価がなされるべきであろう。現代世界の宗教状況は宗教的多元性によって規定されているが、もし、現代世界において宗教全般が何らの現実性(實在性)を有しないとすれば、宗教的多元性についての理論構築に、いかなる意味を認めることができるだろうか。せいぜい可能なのは個々の状況に対処する際のプラグマティックな意味にすぎないであろう。ヒックの宗教理論において注目すべきは、宗教多元主義仮説という宗教哲学的な理論構築の意味が宗教的實在論に支えられることによって確保されている点である。ヒックは、宇宙について人間の経験と理解(人間の世界経験とその理解)が両義的である、つまり、宇宙が自然主義的にも、宗教的にも解釈可能であると主張しているが、近代科学に裏打ちされた自然主義が、現代人の現実理解(現実感覚)を大きく規定していることは否定できないように思われる。これは、宗教言語についての素朴な實在論がその哲学的な根拠を大幅に失ってしまい、非實在論者から非難的になっているとして、先に指摘した通りである。こうした問題状況において、宗教的實在論の再建を試みることは、宗教多元主義はもちろん、宗教的多元性をめぐる宗教理論全体にとって重要な意義を有しているように思われる。とくに、宗教言語の指示機能の分析を通して、宗教的實在論の再構築を目指すことは、ヒックの宗教論を、さらに意味ある仕

方で展開するものとなるのではないだろうか。

文献表

A. ジョン・ヒックの著作

1. [IR]: *An Interpretation of Religion -Human Responses to the Transcendent- Second Edition* : Palgrave Macmillan. 2004.
2. [DQ]: *Disputed Questions* , New Haven: Yale Univ. Press; London: Macmillan. 1993.
3. [MG]: *The Metaphor of God Incarnate* , SCM Press Ltd , First published in Great Britain .1993.
4. ジョン・ヒック著、間瀬啓允・渡部 信訳
1989: 『もうひとつのキリスト教—多元主義的宗教理解—』(日本キリスト教団出版局)

b. その他の参考文献

5. G. デコスタ編集、森本あんり訳：
1997: 『キリスト教は他宗教をどう考えるか—ポスト多元主義の宗教と神学—』(教文館)
6. J.M. ソスキース著、小松加代子訳：
1992: 『メタファーと宗教言語』(玉川大学出版部)
7. 芦名定道代著：
2004: 『科学時代を生きる宗教—過去と現在、そして未来へ—』(北樹出版)
8. ドナルド・デイヴィッドソン著、野本和幸代訳：
2006: 『真理と解釈』(勁草書房)
9. 坂本百大編：
1986: 『現代哲学基本論文集—フレーゲ・ラッセル他—』(勁草書房)
10. 芦名定道
「植村正久とキリスト教弁証論の課題」『アジア・キリスト教・多元性』(現代キリスト思想研究会、第5号、2007年。)
11. 小倉和一
「ヒック宗教多元論の科学的構造」『基督教学研究第19号』(京都大学基督教学会、1999年。)

・引用文献に関して

引用文献については、文献表の記号を用いる。

例：(DQ:12.) は、ヒックの著作 *Disputed Questions* のなかで 12 ページを表す。

(Bahng JunSik 京都大学大学院文学研究科修士課程)

